

サラ・バイクウェル著「実存主義者のカフェにて―自由と存在とアプリコットカクテルを(I)」紀伊國屋書店 2024年4月11日刊を読む

実存主義の定義

1. (1) 実存主義者は、"個人"つまり具体的な「ひとりひとりの人間存在」に関心を持つ。
(2) 人間存在(実存)は人間以外のものとは異なる存在であると実存主義者は考えている。ほかの存在はどうであれ、人間であるわたしは、一瞬一瞬をみずから選んだ結果としての存在である。わたしは"自由"なのだ。
(3) したがって、わたしはみずからの行為に"責任"があり、それはめまいがするようなことだ。

2. (1) "不安"は人間存在そのものと切り離すことができない。
(2) いっぽう、わたしが自由なのは与えられた"状況"のなかだけであり、その状況には、わたし自身の生物学的状態や心理状態、わたしが投げ込まれている世界の物理的、歴史的、社会的要因が含まれる。
(3) さまざまな限界があっても、わたしはつねに上を目指す。わたしは自分自身のあらゆる"投企(または企投。プロジェ)"に情熱を持って関わっている。

3. (1) 人間存在とはかくも、"多義的"である。束縛されていても、それを超越し陽気になることさえできる。
(2) "現象学的"な視点を持つ実存主義は、容易な規則によって現状に対処するのではなく、生の経験をありのままに"記述"する。
(3) 経験をきちんと記述することで、実存主義者は実存を理解し、わたしたちがもっと本来的な人生を生きられるようにしたいと願っている。

P52 ~ 53

<コメント>

- (1) 「1933年、パリ・モンパルナスのカフェから生まれた新しい思想、『実存主義』は、やがて第2次大戦後の学生運動、公民権運動へとつながっていく。サルトル、ハイデッガー、ボーヴォワール、フッサール、メルロ・ポンティ…。哲学と伝記を織り交ぜたストーリー・テリングで世界を魅了したノンフィクション」
- (2) 「世界も自分もどちらも手放さない思考は、いかに可能なのか」

(3)「本は人生をすっかり変えてしまう」

(4)「この事実を、ほかのどんな現代哲学よりもはっきりと証明してみせたのが、1950年代から60年代にかけて世界じゅう広まった実存主義だった」

○本書の「帯」に書き記されたこれらのことばは、まさにその通りだと考えます。チャット GPT や生成 AI が人間としての思考を代替し始めた今こそ、「実存主義」の出番と考えます。

是非、御一読ください。

2024年5月5日(子どもの日)

林 明 夫